　このラーニング・プログラムでは、アーティストが世界を見る時の視点を参加者が共有することを出発点とする。それは知識として伝授されるようなものではなく、さりげなく、自然と身につくようなもので、その瞬間からすぐ使える技能ではないかもしれない。ずっと忘れていて、何年か後に不意に知覚できるものかもしれない。そういう意味でこのプログラムで行われるワークショップは作品と同じものだともいえる。僕はこれまでそう考えて活動をしてきた。彫刻、日本画、洋画、などと同様に「ワークショップアート」という表現の1ジャンルがあって、その精度を上げていこうという話ではまったくない。僕がこれまでも、そして今回のプログラムでもやろうとしているのは日常のアート化である。世界をアートの視点から眺める人をどんどん増やすことである。

　アートを専門家のものとするのは、ステークホルダーのポジションを維持するのと同時に「一般の」鑑賞者にとってもアートをわけがわからないものと決めつけて拒絶する態度にもつながる。例えば、アートは天才によって作り出されたものという考え方がある。僕はどこかにいる天才の存在を否定しないが、この考え方はアーティスト、鑑賞者の両方を、そしてその関係を不幸なものにする。アーティストは「普通の人」とは違う自分のアイデンティティを強迫症的に作り出そうとし、そのキャラクターを得たことにより特権的に「自由に」自分語りができるというのはただただ虚しいものだ。一方鑑賞者の側からは、作品は常人の考えを超えた「天才」によって作り出されたものだとすることで自分のあずかり知らないよそ事として遠ざけてしまう。

　しかし実際には目の前の作品は鑑賞者と同じ時間、同じ世界を共有している個人（またはグループ／コレクティブ）の営みの成果だ。天才云々の色眼鏡を外してみれば、共通言語は両者が考える以上に多い。アーティストは昔も今も作品制作を通してこの世界を知ろうと試み続けている。美術館に来る人たちは、本当はアートの楽しさを、良さをわかりたいはずだ。わからないものは怖い。怖いものと向き合いたくないという防衛本能が働くのは当たり前のことだ。作品の横に掲げられているキャプションを読んでわかった気になるだけではなく、もっとその味わい方を知りたいはずなのだ。そういう人たちが普段の生活を他の視点から眺めることができる視座を獲得しようと美術館に訪れるようになればよい。アーティスト、アート、鑑賞者の関係はもっと幸福なものにできる。

　私たちは、日常生活を送っているとつい近視眼的になり小さなルールの中での勝ち負けや損得にこだわってしまう。しかし、永遠に固定化されたゲームのルールなどない。状況は絶えず変わり続けている（図らずも今回のコロナウイルスの登場によってそれが明らかになった）。視点を変える、ルールそのものを疑う、それまでもそこにあったのに誰も気づかなかった／忘れられていた感覚を見つける、世界の外側を想像する。それらはアートが担ってきた役割だ（もちろんそれすらも疑ってもいいだろう）。僕はこのラーニング・プログラムを、すべての参加者と共に、同じリアルを共有しながらアートをとおしてこの謎に満ちた世界を知るための方法を見つけだす場所としたい。

山本高之